

令和 元年 6 月 17 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26284007

研究課題名(和文)「間文化性の理論的・実践的探求 間文化現象学の新展開」

研究課題名(英文) Theoretical and Practical Research of Interculturality - New Development of Intercultural Phenomenology

研究代表者

加國 尚志 (Kakuni, Takashi)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：90351311

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,200,000円

研究成果の概要(和文)：5年間にわたる23名の共同研究により、5回のシンポジウムを開催し、それらの成果を大学紀要を通して公表することができた。またマーティン・ジェイ『うつむく眼』の共同研究を行い、それを翻訳出版することができた。また著者であるマーティン・ジェイ氏を招いての国際シンポジウムを開催し、国際的な研究交流と研究発信を行うことができた。これらの共同研究を通じて研究分担者間の問題意識と学術的知見の共有と相互交流を行うことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「間文化性」の経験の探求という現代社会における重要な課題について、23名の現象学研究者が共同研究を行うことにより、現象学及び西洋哲学の研究領域に文化と現代生活に関する多様な考察を行うことができた。このことにより、今後、「芸術」「倫理」「宗教」といった側面において現象学的考察を基礎にした間文化性の共同研究を行う地盤を築くことができた。今後これら23名の共同研究者が学界・社会の多様な場面で独自の研究を展開することにより、「間文化性の現象学」についての大きな研究領域の開拓につながるものと確信する。

研究成果の概要(英文)：We made five symposiums in these five years with 23 research collaborators and published our research results in the bulletin of Ritsumeikan University. And we organized research collaboration on Martin Jay's Downcast Eyes and published its translation. We invited Mr. Martin Jay to Ritsumeikan University and organized an international conference where we could have international research exchanges and open it to public. Through these collaborations, we could have our research interchanges and share our academic knowledges between research collaborators.

研究分野：西洋哲学

キーワード：西洋哲学 現象学 間文化性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

間文化現象学の研究は、5年前の2008年度から立命館大学において本格的に開始された。「文化」は歴史的に保存・継承されてきたものという側面をもち、その面の研究は多くなされているが、われわれは、「文化」を、保存されたものを受け継ぎながらも、状況に応答しつつ、新たなものを現れさせていく「運動」と見る。すなわち、固定された「名詞」としてというよりも、「文化する」とでも表現されるような「動詞」的側面を重視する。しかも、この動詞性は、孤立した閉鎖的「文化」のなかで生じるのではなく、われわれの文化は「事実」として閉鎖系でない、異文化との「相互性」・「ハイブリッド性」のなかで生じると捉える。言い換えれば、「文化」はつねにすでに「間文化的」であり、しかも、その間文化性はますます強まると見る。間文化現象学は、この現場を文化中立的な外部の視点から観察するのではなく、その現場の内部に立って、そこに生じるもろもろの対立と融合にいわば身をさらしつつ、おのれの視点そのものをより間文化的に広げていくという仕方、事象の解明を進めてきた。具体的な研究展開においては、「言語」、「遭遇」、「精神」、「共存」、「時間」という5つの重点研究領域が設定された。これらの成果は、内外の学会発表、国内の市販雑誌の特集、成果報告書、単行本(2014年文理閣より刊行)などで公表されている。立命館大学における「間文化現象学研究センター」など内外の拠点形成、研究者養成も成果をあげている。こうした研究展開のなかで、新たな諸問題が浮かび上がってきた。間文化性は、上記の重点領域で扱われた諸問題だけでなく、さらに多くの諸問題に接している。これらについては、研究開始当初から気づかれていなかったわけではないが、しかし、研究展開および状況変化とともに、その重要性が、より深いところから明らかになってきたのである。

2. 研究の目的

間文化現象学は文化と文化の間で生じる間文化的な諸現象を現象学的に解明する。「言語」「遭遇」「精神」「共存」「時間」といった問題に取り組んだ2009年～2013年度の研究にひきつづき、「視覚」「制度」「エコノミー」「倫理」「宗教」といった5つの重点的な研究領域を掲げ、間文化的な研究の視座を広げるとともに、より実践的な諸問題にも取りくむものである。

3. 研究の方法

本プロジェクトは、全体として「現象学」の方法をとる。より具体的には、従来の研究方法を踏まえて、第一に、研究メンバーを「拠点研究者」「中核研究者」「新世代研究者」「横断研究者」に区分し、それぞれの役割を明確にする。第二に、メンバーを重点研究領域ごとに配置して、それぞれの詳細な研究を可能にする。第三に、本研究では海外の研究拠点との連携が必要であり、それらと関係をこれまで以上に緊密にするため、メンバーを海外拠点に対応するように配置する。今回は、相互派遣の「回数」を増やすとともに、研究交流のための滞在と呼べるほどの「期間」を確保できるようにする。さらに、内外の多くの研究者が一堂に会することのできる、比較的規模の大きな国際会議を開催し、研究成果を間文化的に共有する。

4. 研究成果

(1) 2014年度研究成果

2014年度は、Martin Jayの著作『Downcast Eyes』の共同翻訳グループの活動を行なった。メンバーは、亀井大輔、佐藤勇一、青柳雅文、神田大輔、小林琢白、田邊正俊であり、600頁に及ぶ大著の7割を訳した。その翻訳メンバーを中心に平成27年3月25日に立命館大学において、亀井大輔氏(中核研究者)のコーディネートによる「視覚」をテーマとしたワークショップを開催した。研究発表を行なったメンバーは、和田渡、田邊正俊、佐藤勇一の各氏である。本ワークショップでは、ジェイの著作で示された20世紀フランス哲学における視覚の権威剥奪と反視覚中心的言説の広がりという見方に応答しつつ、パタイユ、デリダ、ニーチェ、メルロ＝ポンティ、フーコー、ハイデガー、リルケにおける視覚のあり方やその重要性がいずれも充実した論述によって展開され、間文化的な問題へのアプローチの可能性が示された。このワークショップによって、さまざまな視点からジェイの著作の内実を検討することができ、ジェイの翻訳作業を進めるうえでも大変有益なものであった。

(2) 2015年度研究成果

2015年度は交付申請書に記載した通り「制度化」の問題をめぐって研究を展開し、2016年3月13日に立命館大学衣笠キャンパス末川記念会館講義室で研究発表のシンポジウムを開催した。このシンポジウムでは、研究分担者の廣瀬浩司氏、小林琢白氏が発表を行い、研究代表者の加國尚志が司会を務めた。

研究の国際的展開については、海外からの研究者招聘については研究代表の所属機関である立命館大学衣笠総合研究機構間文化現象学研究センターの資金より支援をいただいたので、研究分担者の海外研究出張を重点的に行なった。研究分担者の佐藤勇一氏は、3月にフランス国立図書館にて、メルロ＝ポンティの未公刊文書のマイクロフィルムを閲覧。とくに、MF12775のCollege de France. Notes de lecture relatives aux derniers travaux sur Descartes.を閲覧し、デカルトにおける有限性の問題に関するラポルトとゲルーの考察にたいするメルロ＝ポ

ンティのノートを研究した。

(3) 2016年度研究成果

2016年度は、2017年3月16日に研究会として、「間文化現象学ワークショップ」を立命館大学衣笠キャンパス末川記念会館にて開催した。この研究ワークショップは、本研究の研究分担者である亀井大輔氏、佐藤勇一氏が発表を行い、研究協力者として藤岡俊博氏（滋賀大学）がコメンテーターとして参加した。このワークショップは「研究実施計画」に記した通り、「エコノミーと間文化性」をテーマとして行われ、亀井大輔氏からは「エコノミーと戦略--ジャック・デリダの脱構築における資源（リソース）の問題」として、デリダにおける「エコノミー」概念の解釈が行われた。また佐藤勇一氏からは「エコノミーと自然法をめぐる間文化的考察--モンテーニュの新大陸とケネーの中国」として、間文化的問題を自然法の成立から考えるという解釈が行われた。ともにたいへん充実した発表と討議が行われ、研究会として十分な成果を収めることができた。

また2016年12月17日には、同じく立命館大学衣笠キャンパス末川記念会館で、研究分担者の川瀬雅也氏の協力により、日本ミシェル・アンリ学会と共催でフレデリック・セレール氏（シカゴ大学） 米虫正巳氏（関西学院大学）を招いて国際シンポジウムを開催した。これにより、本研究が目標とする国際的な共同研究と研究ネットワーク形成を実現することができた。

(4) 2017年度研究成果

2017年度は講演会、ワークショップを開催することができた。講演会、ワークショップについては、マーティン・ジェイ氏（カリフォルニア大学名誉教授）を招聘し、本共同研究の研究分担者が翻訳した『うつむく眼』(The Downcast Eyes)について、ワークショップと講演会を開催した。ワークショップでは同書の翻訳を担当した研究分担者6名(亀井大輔氏、青柳雅文氏、佐藤勇一氏、神田大輔氏、小林琢自氏、田邊正俊氏)がそれぞれの視点から同書について発表を行い、ジェイ氏がそれに意見を述べ、討議を行った。また講演会ではジェイ氏は西洋の視覚文化と東洋の視覚文化とを比較考察し、「間文化性」と「視覚」について共同研究を行ってきた本共同研究にとって大きな寄与をもたらした。

同じく2017年度には、共同研究の年度別研究テーマである「倫理」について考察するために、共同研究のテーマを「水俣」として、ワークショップを行った。研究分担者の吉川孝氏がコーディネーターを務め、発表者として福永真弓氏（東京大学）、佐藤静氏（大阪樟蔭女子大学）が発表を行った。このワークショップにより、「水俣」という具体的な事件から、「実践」についての現象学的倫理を考察する可能性が開かれた。

これらの研究に加え、研究分担者による研究も進捗し、著書7本、論文17本、学会発表16本が成果公表され、共同研究の成果を挙げることができた。また本共同研究が二年前に行ったワークショップの論文を『立命館大学人文科学研究』(立命館大学人文科学研究所発行)に掲載することができた。

(5) 2018年度研究成果

2018年度は当研究の最終年度にあたり、これまでの活動を集約するような活動を行うことができた。まず、この研究において共同研究によって2017年度に翻訳が完成したマーティン・ジェイ『うつむく眼』についての国際シンポジウム（2018年度3月28日：立命館大学）の成果を『立命館大学人文科学研究所紀要』No.118（立命館大学人文科学研究所 2019年2月）に英文・日本語で掲載することができた。このことにより、当研究における共同研究の成果を、活字媒体を通じて国際的に発信することができた。またこれまで毎年行ってきた共同研究のシンポジウムとして「間文化性と宗教」（2019年3月17日：立命館大学）を開催することができた。このシンポジウムでは川瀬雅也氏、古荘真敬氏、野間俊一氏の提題と討議が行われ、間文化性と宗教についての現象学的考察がなされ、研究分担者間で多くの実りある見解を共有することができたと同時に、「間文化性」をめぐる当研究のしめくりとして、「宗教」の問題の重要性を再認識し、今後の共同研究の展開への方針をつかむことができた。

研究代表の加國は、2018年4月13日に香港中文大学で開催された "Symposium on "Phenomenology and (Post-) Structuralism" において "Not Touching Him, Merleau-Ponty Around Derrida's Lecture of Merleau-Ponty" を発表し、国際的な研究交流を行うと同時に、この間の研究の成果を国際的に発信することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計83件)

加國尚志 「メルロ＝ポンティとイメージの問題」形象3号 2018年 44-64 査読無

加國尚志 「キアスム、非連続の連続 西田哲学と後期メルロ＝ポンティ存在論の接するところ」西田哲学会年報 第14号 2017年 72-84 査読無

加國尚志 「抽象芸術と感情-アンリの生の現象学とリオターールの崇高-前衛論から」ミシェル・アンリ研究 Vol.7 2017年 21-39 査読無

加國尚志 「身体と肉-サルトルとメルロ＝ポンティの身体論再考」 『サルトル読本』2015年 204-218 査読無

加國尚志 「私は私に触れる」: まるブランシュと現象学: ミシェル＝アンリとメルロ＝ポンティの解釈を中心に」 フランス哲学・思想研究 19 2014年 13-26 査読無

〔学会発表〕(計 85 件)

Takashi Kakuni “ Not Touching Him, Merleau-Ponty Around Derrida ’s Lecture of Merleau-Ponty” Symposium on “ Phenomenology and (Post-) Structuralism” (招待講演 国際学会) 2018年

加國尚志 「錯綜体、潜在性 - 市川浩身体論再読」 日仏哲学会プレ・イベント企画「見果てぬ哲学」(招待講演) 2018年

加國尚志 「メルロ＝ポンティにおける現象学と形而上学」 土井道子記念京都哲学基金シンポジウム(招待講演) 2017年

〔図書〕(計 23 件)

亀井大輔 『デリダ 歴史の思考』 法政大学出版社 2019年 276頁

加國尚志 『沈黙の詩法 メルロ＝ポンティと表現の哲学』 晃洋書房 2017年 238頁

谷徹 『間文化性の哲学』 文理閣 2014年 284頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

取得状況(計 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2)研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

(1)研究分担者

研究分担者氏名：北尾 宏之
ローマ字氏名：Kitao Hiroyuki
所属研究機関名：立命館大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：00211194

研究分担者氏名：榊原 哲也
ローマ字氏名：Sakakibara Tetsuya
所属研究機関名：東京大学
部局名：大学院人文社会系研究科（文学部）
職名：教授
研究者番号（8桁）：20205727

研究分担者氏名：古荘 真敬
ローマ字氏名：Furusho Masataka
所属研究機関名：東京大学
部局名：大学院総合文化研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：20346571

研究分担者氏名：村井 則夫
ローマ字氏名：MURAI Norio
所属研究機関名：中央大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：20366917

研究分担者氏名：吉川 孝
ローマ字氏名：Yoshikawa Takashi
所属研究機関名：高知県立大学
部局名：文化学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：20453219

研究分担者氏名：村上 靖彦
ローマ字氏名：Murakami Yasushiko
所属研究機関名：大阪大学
部局名：人間科学研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：30328679

研究分担者氏名：川瀬 雅也
ローマ字氏名：KAWASE Masaya
所属研究機関名：島根大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：30390537

研究分担者氏名：神田 大輔
ローマ字氏名：KANDA Daisuke
所属研究機関名：立命館大学
部局名：文学部
職名：非常勤講師
研究者番号（8桁）：30469100

研究分担者氏名：谷 徹
ローマ字氏名：TANI Toru
所属研究機関名：立命館大学
部局名：文学部
職名：教授

研究者番号（8桁）：40188371

研究分担者氏名：野間 俊一
ローマ字氏名：NOMA Shun'ichi
所属研究機関名：京都大学
部局名：医学研究科
職名：講師
研究者番号（8桁）：40314190

研究分担者氏名：佐藤 勇一
ローマ字氏名：SATO Yuichi
所属研究機関名：福井工業高等専門学校
部局名：一般科目(人文系)
職名：准教授
研究者番号（8桁）：40469101

研究分担者氏名：田邊 正俊
ローマ字氏名：TANABE Masatoshi
所属研究機関名：立命館大学
部局名：文学部
職名：非常勤講師
研究者番号（8桁）：40648284

研究分担者氏名：田口 茂
ローマ字氏名：TAGUCHI Shigeru
所属研究機関名：北海道大学
部局名：文学研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：50287950

研究分担者氏名：伊勢 俊彦
ローマ字氏名：Ise toshihiko
所属研究機関名：立命館大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：60201919

研究分担者氏名：小林 琢自
ローマ字氏名：KOBAYASHI Takuji
所属研究機関名：立命館大学
部局名：文学部
職名：非常勤講師
研究者番号（8桁）：60518091

研究分担者氏名：浜渦 辰二
ローマ字氏名：HAMAUZU Shinji
所属研究機関名：大阪大学
部局名：文学研究科
職名：招へい教授
研究者番号（8桁）：70218527

研究分担者氏名：和田 渡
ローマ字氏名：WADA Wataru
所属研究機関名：立命館大学
部局名：文学部
職名：非常勤講師
研究者番号（8桁）：80210988

研究分担者氏名：亀井 大輔
ローマ字氏名：KAMEI Daisuke
所属研究機関名：立命館大学
部局名：文学部
職名：准教授

研究者番号（8桁）：80469098

研究分担者氏名：池田 裕輔
ローマ字氏名：IKEDA Yusuke
所属研究機関名：東京大学
部局名：大学院人文社会系研究科(文学部)
職名：特別研究員
研究者番号（8桁）：80748525

研究分担者氏名：廣瀬 浩司
ローマ字氏名：HIROSE Koji
所属研究機関名：筑波大学
部局名：人文社会系
職名：教授
研究者番号（8桁）：90262089

研究分担者氏名：林 芳紀
ローマ字氏名：HAYASHI Yoshinori
所属研究機関名：立命館大学
部局名：文学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：90431767

研究分担者氏名：青柳 雅文
ローマ字氏名：AOYAGI Masafumi
所属研究機関名：立命館大学
部局名：文学部
職名：非常勤講師
研究者番号（8桁）：90469099

研究分担者氏名：松葉 祥一
ローマ字氏名：MATSUBA Shoichi
所属研究機関名：神戸市看護大学
部局名：看護学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：00295768